書物の楽しみ

小田切 進

冬樹社

小田切　進
1924年，東京生れ。早稲田大学文学部国文科卒業。
現在，日本近代文学館理事長，立教大学教授・日本近代文学専攻，文芸評論家。
主要著書『昭和文学の成立』『日本近代文学の展開』『日本の名作』その他。
編著『現代日本文芸総覧』全四巻により毎日出版文化賞特別賞を受賞。

書物の楽しみ
昭和五十二年九月三十日第一刷発行

著　者　小田切進
発行者　高橋直良
発行所　冬樹社
東京都千代田区神田神保町二―一八
電話東京二六四―〇三四六
振替東京八―七七五七
印刷所　稲葉印刷
製本所　美成社
© Susumu Odagiri
0095-10259-5190

書物の楽しみ／目次

Ⅰ

親と子の読書　11
書物との出会い　18
実利的でない読書　20
文学をどう読むか　23
国文に入るまで　29
わが蔵書　35
現代の大学生活　37
卒業論文の傾向　40
学生と読書　44

Ⅱ

旅・出会い　59
新しい中国・古い中国　60

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

ソヴェトの旅　104
一枚の地図　123
明治の東京　125

Ⅲ

病床の高見さん　149
高見順没後十年　155
文学館の伊藤さん　157
あたたかい人　164
舟橋さんと私　168
久松潜一先生のこと　171
＊
近代文学館の歩み　173
近代文学のミュージアム

"情報化"時代の図書館 212

Ⅳ

雑誌を追って 221
日記とわたし 229
文学者の日記 232
文学展の楽しさ 235
文学者の書 238
文豪の手紙 240
個人全集ブームについて 243
消えてしまった本 246
複刻のこと 249
名著・名作の復元 255
造本・装丁コンクール 258

マイクロフィッシュのこと　261
武者小路さんを偲んで　265
芥川の初版本　268
昭和初期文壇の漱石評価　270
原稿料物語　273
編集者　275
『新潮』の八百号　277
『文芸春秋』の功罪　280
＊
ミニ発禁物語　283
暗くて長い夜　290
あとがき　303
初出一覧　304

装幀　川島羊三

書物の楽しみ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

I

親と子の読書

学生時代からの親しい友人Oが、月に一回か二回、週末の夜にあらわれ、しゃべり込んでいく。三年前、私の移ってきたところがOの家に近く、気楽な行き来ができるようになった。遅くなっても、乗物の心配はいらないし、三十年前の学生時代にかえったような気分になって楽しい。しかし同じ仲間のTやHのところに、孫ができた、という種類の話も出てくるほどだから、おのずと話題や、やりとりの仕方も、学生時代のそれとはちがってくる。Oは保険会社のサラリーマンで、五年ほど前いくつかの支店長をつとめ終えて東京に帰ってきた。大学での専攻は近代経済学。わたしとは畑ちがいだが、勤労動員中に軍需工場で仲間になり、いらい三十三年のつきあいになる。結婚がわたしより遅かったので、この春、大学に入った息子と、下にまだ中学二年の娘がいる。以下はOの家の話で、Oの話からわたしはいろいろ教えられた。

O家の話—その1

娘が中学生になって間もない頃、教科書で太宰治の『走れメロス』を読んできた。いつもはテレビか、漫画ばかり見ている娘が、母親に「お母さん、面白いからこれ読んでごらんなさい」と言ったと

いう。「太宰治なら、あたしよりお父さんがよく読んでいるから、聞いてごらんなさい」と答えたそうだ。四、五日のあいだ娘は何も言いださなかったが、果して一週間ほどたった夜、「あれ、とても素晴らしいでしょ」と言ってきた。

とっさに、Oは「そうかな、そんなにI子には面白かったのかい」と、答えてみた。あの太宰の短編が、いい作品だということはわかっていたが、わざとOは、こともなげに「I子は『走れメロス』のどこに感心したのかな?」と反問してみた。

「お父さんだって、友情というものを、こんなによく書いた小説を読んだら、感動したんじゃない?」と応じてきた。思いきって、Oは娘を試してみることにした。

「お父さんも、悪い小説だとは思わないし、嫌いな作品じゃないけれど、感動はしなかったな。友情というものは、素晴らしいものだし、太宰がそれに憧れている気持はよく解るけれど」と言うと、すっかり太宰に感服してしまった娘は「あたしは、その友情の書きかたが、とてもいいと思うの。メロスはセリヌンティウスを裏切りそうになって、裏切らなかったでしょ。何度も、村に帰って幸せに暮らせたら、と迷うけれど、その気持に打ちかって、刑場に飛んでゆくところ、あたし感心したんだな」と、眼を輝かせて言った。

娘がまっとうな読みかたをしているのに、Oはホッとしながら、「そうだね。セリヌンティウスも、メロスを疑った。だから二人で殴りあい相擁した。あそこも、よかったね。友情の美しさを、こんなに見事に書いた小説はない位だ、と思うんだが、父さんにはあの暴君ディオニソスが、二人の友情と信実の行為に心をうたれて、すっかり改心した、というところが引っかかるもんだから、どうしても感動ができなかったんだ」と、思いきって、娘を一人前扱いし、本音を吐いてみた。娘はちょっと考

えこんだが、ややあって、「友情の美しさが書けてれば、それで素晴らしいんじゃないの？　悪い王様なんて、問題にしなくてもいいのに」

Oはここが大事なところだと思って、「父さんは、I子よりもう少し大人になって、大学時代に読んだんだ。戦争中のことで、I子にはまだ解らないかも知れないけれど、日本中に、暴君ディオニソスみたいな恐ろしい者ばかりいたんだ。そのために父さんの友達は、ほんとうは〝死にたくない〟と言いのこして、戦場に次々と出かけていって死んだんだ。I子の言うとおり、小説はとてもいいんだけれど、そんな時代に、こういう小説が書かれ、ちょうどそんな悪い時代に、読んだものだから、父さんはどうしてもこだわり、感心したけれど、感動はできなかったんだ」

娘は「そういうものかなあ。いい作品だから、書かれてから四十年近くたっても、人を感動させるって、先生も言っていたのに……」とつぶやくように言った。

「父さんは、実は、太宰は好きな作家の一人で、一時は熱心に読んだ。今でも、好きかも知れない。『走れメロス』は、I子の言うとおり、太宰の作品全部をつうじても、とてもいい小説だと思う。友情は人間にとって何より美しいものの一つだ。その友情の尊さ、美しさが生き生き伝わってくるからね。だから、なおのこと、父さんは、父さんの抱いた疑問にこだわるのかなあ。死んだAという友達と、この小説を一緒に読んで『いいなあ』って、感心したんだが、二人とも感動はできなかったんだよ」と、固執した。娘は気の毒そうな表情をして「今は戦争じゃないから、ディオニソスはいないでしょ。Aさんは可哀想だけど、お父さんがいつまでもこだわるのはおかしいな」と笑った。Oは、もうこれ以上は必要ないと思ったが、横から母親が「案外、今でもあちこちに暴君ディオニソスみたいな人がいるかも知れませんよ」とまぜっかえした。

Oはこんなことがあった後、わたしに「これで良かったのかな」と言う。わたしは「とても良かった。ただ『うん、そうだ。〈走れメロス〉は、とてもいい。父さんも感動したよ』ですませるより、はるかにいい。I子ちゃんを小娘扱いせずに、親父のほんとうの気持を、思いきって言ったんだから。今は解らなくても、I子ちゃんが何かの時に、戦争のこと、社会のこと、社会と人間のかかわりとか、いろいろなことを考え、また思いあたったりすることがあって、親父を理解し、信頼することになる」と、答えた。わたしはOの態度に感服した。

しばらくして、Oがまたやってきた。こんどは「高校三年の息子が、むつかしいことを言いだしたので、議論になった。教えろ」というのだった。「議論なら俺はM夫君の味方になるが、資料はいくらでも持っていけ」と、参考文献を提供した。Oは「何を考えてるのか解らん」と口癖に言っていながら、見ると議論の始まったことがうれしそうだった。以下はまたOの家の話である。

O家の話—その2

息子の教科書に、こんどは森鷗外の『舞姫』が出てきた。帰ってくると、M夫は「国語の先生が『舞姫』は名文だが、真のロマンティシズムとは言いがたい、と否定的だったけれど、ぼくは非常に美しいので、日本の一八九〇年の小説としては大変なものだと思った」と、訴えにきた。太宰とちがって、Oは鷗外はよく知らないし、息子とは文学の話などかつて全くかわしたことがなかったので、あわてた。

Oは息子の年齢の頃、やはり、『舞姫』を読み、息子とは反対に作者に強い反発を感じ、いらい鷗

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c